

## 棺一基四顧茫々と一情態性／エポケー／詩

小林 信之（早稲田大学）

一般に感情や情動といった概念は、西欧形而上学の歴史のなかで、魂の自己感受といった意味あい、世界との受動的な関係性を規定するものであった。その場合、何らかの対象によって触発されて、ある感情がわたしの内部に湧きおこるというように、主観=客観関係を前提したとらえ方がなされてきた。しかもその際感情は、間主観的な共同世界における出来事として、公共的な言説によって分節化され理由づけられうるものと見なされた。

それに対して『存在と時間』のハイデガーは、感情や情動や気分の存在論的規定として「情態性」という語を採用し、主観=客観関係を前提とした<sup>オンデイツシユ</sup>存在的な理解を慎重に排除する。つまり<sup>オンデイツシユ</sup>存在的な次元においては、環境世界において出会われる物によって気分づけられる場合であれ、他者との関係性によって惹きおこされる感情であれ、世界の側に自己の関心が向けられ、世界の側から自己の有様を理解してしまっているがゆえに、世界内存在そのものは隠蔽されてしまう。結論的にいえば、情態性という概念にハイデガーが要求しているのは、世界内存在としてのわたしたちの有様を全体として包括しうる本質規定（実存疇）なのである。

ハイデガーは、ある特定の情態性にのみ、わたしたちの存在を全体的に照らしだす力を認める。彼にとって哲学的に問うに値するのは、この意味での根本気分（不安、退屈等）だけである。

とりまとめていえば、情態性とは以下の点において際立てられる。

- (1)卓抜な開示性であること（世界内存在たるわたしが、その存在自身において照らしだされるという意味で、**Sichbefinden** は、「自照」と意識してもいいかもしれない）
- (2)理解に先立つ先行的地平の開示（ある気分に関わ「襲われる」というように、意志的ではない受動性と被投性が問題となる）
- (3)単独化された自己性の開示（公共的言語による分節化ではなく、固有で私密的な自己存在の顕在化である）

本論では、受動性や欲望としての意志の問題など、ひろく現代的議論の文脈のなかで、いま一度情態性について主題化したいと考えるが、その際、鍵となる概念としてエポケーを挙げたい。クラウス・ヘルトは、古代ギリシアにはじまり、ピュロンの懐疑論をへて、デカルトの方法的懐疑にいたる哲学史をエポケーという観点からたどり、二〇世紀の現象学に到達するまでの前史として描きだしている（「真理をめぐる抗争」）。またヤン・パトチカは、フッサール現象学における還元操作にとどまらない徹底化されたエポケー概念を構想している（「エポケーと還元」）。

このようにエポケーを広義の徹底化された意味において考えるならば、たとえば不安という情態性こそ、学的意志の停止さえ含意するような、もっとも鋭利なエポケーの刃を備

えているのではなからうか。というのも情態性とは、先意志的な受動性の次元において、否応なしにわたしたちの世界内存在を照らし出すような開示性にほかならないからである。

その際、不安や退屈など存在論的次元で語られる情態性は、たしかに哲学者にとってのエポケーとして切実に要請されたものであった。だがまた、わたしたちのほんの些細な日常のなかで、束の間浮かびあがっては消えていく感情や気分のうちに、世界内存在の「自照」は起こりうる。そうした自照の経験を象り、分節化する言葉、むしろ哲学者の概念以上に犀利なエポケーの言葉を、とりわけ詩のうちに見いだすことができよう。

情態性の伝達を固有の目標とする詩（『存在と時間』）の言葉においてわたしたちは、エポケーとともに被投的に瞬視された状況（気分的に開示されたそのつどの世界）に遭遇する。そこでは歴史的にもたらされた時の留まり（Epoche）の様相がそのつど顕在化するであろう。

この論考のタイトルに掲げた詩句は、ある死刑囚の俳句から採ったものである（大道寺将司「<sup>かんいっきし こぼうぼう</sup>棺一基四顧茫々と霞みけり」）。周囲はただ漠と霞むばかりのなかに、柩がひとつ佇んでいるという寂寥とした風景を切り取ったものとして、さしあたりわたしたちはこの句を解することができる。そして重罪を犯し四十年近くを獄舎で過ごした稀有なひとの心象をここに見てとることもできるかもしれない。しかし同時に、「棺一基」という単独化の極北の表現には、日々死を脚下に凝視しつづける者にのみ授けられた根本気分が凝集しているといわねばならない。